

涙の谷に落すべく、
われらのいのちあまりに尊ときを
値多きを感じずや。

—甲辰十二月十二日—

あさがほ

あゝ百年の長命も
暗の牢舎ひとやに何かせむ。
醒めて光明ひかりに生きぬべく、
むしろ一日いちひの榮願はなむねふ。

寝がての夜のわづらひに
昏耗ほぼけて立てる朝の門かど、
（これも慈光のほゝみよ）

朝顔を見て我は泣く。「心の聲」畢

—甲辰十二月二十二日夜—

白 鴿

愁ひある日を、うら悲し
 鴿の啼く音の堪へがたく、
 水際の鳥屋の戸をあけて
 放てば、あはれ、白妙の
 蓮の花船行くさまや、
 初摺ち静かに、秋の香の
 澄みて雲なき青空を、
 見よや、光のしたゝりと、

眞白き影ぞさまよへる。
 あゝ地の悲歌をいのちとは
 をさなき我の夢なりし。
 ひたりも深き天の海
 一味のむねに放ちしを
 白鶴びやくこに何うらむべき。
 落す天路の歌をきよ、
 ましろき影をあふぎては、
 寧ろ自由なる逍遙せうぎょうの
 遮さへりなきを美まむ。

—乙巳一月十八日—

傘のぬし

柳の門かどにたゞすめば、
 胸の奥より撞つくに似る
 鐘がさそひし細雨に
 ぬれて、淋しき秋の暮、
 絹むらさきの深張の
 小傘こかさを斜はに、君は来ぬ、
 もとより夢のさまよひの
 心やさしき君なれば、

あゆみはゆるき駒下駄の、
その音に胸はきざまれて、
うつむきとづる眼には
灰ほむらさきの霧もわきぬ。

袖やふるゝと、をのゝきの
もろ手を置ける胸の上、
言葉も落ちず、手もふれず、
歩みはゆるき駒下駄の
その音に知れば、君過ぎぬ。

あゝ人もなき村路むらみちに
かへり見もせぬ傘かさの主、
心いためて見送れば、
むらさきの霧やうゝゝに
あせて、新月野しんげつにいづる
空のうるみも目に添へつ
柳の雫ひやゝかに
冷えし我が頬に落ちにける。

落 櫛

磯回いそわの夕ゆふのさまよひに
 砂に落ちたる牡蠣かきの殻
 拾ひろうて聞きけば、紅くわの
 帆ほかけていにしし會保船えぼねの
 ふるき便たよりもこもるとふ
 青潮あせほ遠とほきみんなみの
 海うみの鳴なる音ねもひゞくとか。
 古城ふるきの庭にわに松笠まつがさの

土つちをはらうて耳みみにせば、
 もゝ年とし過とほぎしそのかみの
 朱あけの欄かざしめぐらせる
 殿みやの夜深よこき御簾みすだの中、
 千鳥ちどり縫ぬひたる匂におひ衣ぎ
 行燈あんどうの灯あかりにうちかけて、
 胸むねの秘戀ひこひ泣なくは姫ひめが
 七尺ななせふ落おつる秋髪あきかみの
 慄おそひを吹きし松まつの風
 かすけき聲こゑにわたるとか。

あゝさは君が玉の胸、
 青潮遠き南の
 海にもあらず、もゝとせの
 古き夢にもあらなくに、
 などかは、高き彼岸の
 うかゞひ難き園の如、
 消息もなきふた年を、
 霧のかなたに秘めたるや。
 君夕毎にさまよへる
 こゝの櫻の下陰に、

今宵おぼろ夜十六夜の
 月にひかれて来て見れば、
 なよびやかなる弱肩に、
 こぼれて匂ひ添へにけむ
 落葩よ、地に布きて、
 夢の如くもほの白き
 中にかゞやく波の形、――
 黄金の蒔繪あざやか
 あゝこれ君が落葩よ、
 わなゝきこゝろ目を瞑ぢて、

ひろうて耳にあてぬれど、
 君が海なる花潮はなうしほの
 響きもきかず、黒髪の
 見えぬゆらぎに秘め給ふ
 み心さへもえも知らね。
 まどひて胸にかき抱き
 泣けば、百ももの齒皆生きて
 何をうらみの蛇くさねや、
 あゝとせのわびしらに
 なさけの火盡ほさびもえくゝて

瘦せにし胸を捲きしむる。

—乙巳二月十八日夜—

泉

森の葉を蒸す夏照りの
 かゞやく路のさまよひや、
 つかれて入りし楡の木
 下陰に、あゝ瑞々し、
 百葉を青の御統と
 垂れて、浮けたる夢の波、
 眞清水透る小泉よ。
 いのちの水の一掬

いざやと下りて、深山の
 小瘴の如く、勇みつゝ、
 もろ手をのべてうかゞへば、
 しら藻は髪にかざゝねど
 水神か、いかに笑はしの
 ゆたにたゆたにもゝ影、
 紫三稜草花ちさき
 水面に匂ふ若眉や、
 玉頬や、瑠璃のまなざしや。
 あゝ一掬はねど、

口は無花果香もあまき
 露にうるほひ、涼しさは
 胸の奥まで吹きみちぬ。
 夢と思ふに、夢ならぬ
 さと云ふ音におどろきて
 眼あぐれば、夢が、また、
 木の間まぼろし鮮やかに
 垂葉わけつゝ駈けて行く。――
 さは黒髪のおゆらぎに
 小肩なよびの小女子よ。――

あゝ常夏のまぼろしよ、
 など足早に過ぎ給ふ。
 ねがふは君よ、夢の森
 にほふ緑の涼蔭に
 暫しの安寝守らせて、
 (しばしか、夢の永劫よ。)
 われ夢守とゆるせかし。
 目ざめて仄に笑ます時、
 もろ手は玉の泔坏
 この眞清水を御泔水に

手づから君にまわらせむ。
 あゝをとめごよ、幻よ、
 はらゝの袖や愛の旗、
 などさは疾き足どりに、
 天の鳥船のかくろひに、
 緑の中に消えたまふ。

——乙巳二月十八日夜——

小田屋守

身は鄙さびの小田屋守、

首蓓白き花床の

日照りの小畔、まろび寝て、

足るべらなりし田子なれば、

君を戀ふとはえも云へね、

水無月瑩とび亂れ、

暖き風吹く宵の間を、

ひるがほ草の蔓ながき

小田せだの小徑こぎちを匂かはせし
 都みやこぶりなるおん袖そでに、
 ゆきすり心こころ蕩たふかせし
 その移うつり香かの胸むねに泌しみみ、
 心こころの栖すま家か君きみにとて
 なさけの小窓せまどひきしより、
 あゝ吹ふく笛ふえのみだれ音ねや、
 みだりごゝろは、青波あおなみの
 稲田いなだの畔ほとりの堰せききかねて
 夏照なつあきり走はるぬるみ水、

世よに許ゆるりがたき貴人きじんの
 御姫みぎなる君きみを追おひぞする。
 今は四方よもだ田だの稻いなたわわ、
 琥珀くわくわくの玉たまをむすべるに、
 ひめてはなたぬ我が思おもひ、
 たゞわびしらの思おもひの
 涙なみだとこそはむすぼゝれ、
 あゝ玉苑たまえんのふかみ草くさ
 大きおほ葩はな咲ひらまむとて
 追おひやはられし野のの鳥とりの

つたなき身み様さままねけるや。
 こよひ刈かり穂ほの庵いほの戸かどに
 八東いっとう穂ほ守まもる身みを忘れ、
 小田刈せだかり月の亥み中なか月つき、
 君きみ知りしより西も夜よぞと
 さまよひ來きぬるみ館やみだの
 木も樺ぎ花はな咲さく垣かきのもと、
 灯あかりかけ明あるき高たか窓まどに
 君きみが弾ひくなる想おも夫む憐れな。
 ああ鄙ひなさびの小田屋せだや守まもり、

笛ふえなげすてゝ、花はなつみて、
 花はなをば千ち々に裂ちきすてゝ、
 溝みぞこえ、厚あき垣かきをこえ、
 君きみが庭にわには忍しのび入いる。

凌霄花

鐘樓しゆろうの柱まき上げて
 あまれる憂の幻と
 流れて石の階かまほしの
 苔に垂れたる夏の花、
 凌霄花りうせうかかどやかや。
 花を被かきて物思ものいへば、
 現うつならなく、夢ならぬ
 たゞ影深かげふかの花の路、

君ほゝゑめば霧かをり、
 我もの云へば蕾咲く、
 歩み音なき遠つ世の
 苑生そのよの中の逍遙せうぎょうの
 眩くらゆきいのち近づくよ。
 身は村寺むらでらの鐘樓守、――
 君逝いきしより世を忘れ、
 孤兒みなしごなれば事もなく
 御僧みそうに願ひゆるされて、
 語こともなき三とせ夢心地、

君が墓あるこの寺に、
 時告げ、法の聲をつげ、
 君に胸なる笑みつけて、
 わかきいのちに鐘を撞く。――
 君逝にたりと知るのみに、
 かんばせよりも美しくしき
 み靈の我にやどれりと
 人は知らねば、身を呼びて
 うつけ心の嘔とぞ
 あさける事よ可笑しけれ。

あやの鳥鳴く夏の晝
 御寺まわりの徒歩の跡
 ひと日み供に許されて、
 この石階の休らひや、
 凌霄花花二つ
 摘みて、一つはわが襟に、
 一つは君がみつむりの
 かざしに添へてほゝゑませ、
 み姉と呼ぶを許りにける
 その日、十六かたくなの

わが胸^{むね}満^みす匂^{にお}ひ潮、
 おほ葩^{はなびら}の、名は知らね、
 映^はゆき花船^{はなふね}うかべしか。
 さればこの花、この鐘樓、
 我が魂^{たましひ}の城^{しろ}と見て、
 夏^{なつ}ひねもすの花^{はな}まもり、
 君^{きみ}が遺品^{ゐりごころ}の、香^{かほ}はのこる
 上^{かみ}の代^よぶりの小忌衣^{せきぎぬ}、――
 昔^{むかし}好^{この}みの君^{きみ}なれば
 嘗^{なほ}ては御簾^{みす}のかけ近^{ちか}き

衣桁^{いこう}にかけて、空薫^{そらたぐ}の
 風流^{ふうりゅう}もありし香^{かほ}のあとや、――
 靑草摺^{あせぞり}の白絹^{しろきぬ}に
 袖^{そで}にかけたる紅^{べに}の紐^{ひも}、
 年^{とし}の經^へぬれば裾^{すそ}きれて
 鶉^{うらこも}衣^{ぎぬ}となりたれ、
 君^{きみ}が遺品^{ゐりごころ}と思^{おも}ほへば
 猶^{なほ}わが身^みには玉袍^{たまぼう}と、
 男妾^{おとめかけ}にうち裝^{かま}ね、
 人の云^いふ語^{ことば}は知らねども、

胸なる君と語らふに、
 のうぜんかづら夏の花
 かどやかなるを、薫するを、
 かの世この世の浮橋の
 『影の園』なる玉の文字。
 花を被きて、石に寝て、
 君が身めぐる照る玉の
 眩ゆきいのち招きつゝ、
 あゝ招きつゝ、迎へつゝ、
 夕つけくれば、朝くれば、

ほゝをみて撞く巨鐘の
 高き叫びよ、調和よ、――
 その聲すでに君や我
 ふたりの魂の船のせて
 天の門にし入りぬれば、
 入の云ふなる放心者、
 身は村寺の鐘樓守、
 君に捧げし吾生命の
 この喜悅を人は知らずも。

草 苺

青草かをる丘の下、

小唄ながらに君過ぐる。

夏の日ざかり、野良がよひ

駒の背にして君過ぐる。

君くると見てかくれける

丘の草間の夏苺、

日照りに蒸れて、青牀や、

草いきれする下かげに、

天の日うけて情ばみ

色ばみ燃えし紅の珠、

鶉の床の丘の邊に

もとより鄙の草なれど

あゝ胸の火よ、紅の珠、

とどろき心ひさまづき、

手觸れて見れば、うま汁に

あへなく指の染みぬるよ。

素足^{すあし}刈る身は十五、

夏草しげる中なれば、

心の露はかくれたれ、

くろ髪捲ける藍染の

白木綿君に見えざるや。

過ぎし祭の春の夜、

おぼろ夜深み、酒ほぎの

庭に、手とられ、袖とられ、

君に選られて、はづかしの

唄に盃さゝれける

あゝその夜より、姿よき、

駒もち、田もち、家もちの

君が名になど頬の熱る。

今君行くよ、丘の下、――

かゞやく路を、若駒の

白毛ゆたかの乗様や、――

聲し立てねば、えも向かで

小唄ながらに君行くよ、

あゝ草蔭の夏苳、

天の日うけて情ばみ

色ばみ燃えて、日もすがら

くちびき甘き幸待てど、

醜^{しづ}卑^ひなれば、君が園
 枝^{えだ}瑞^{みづ}々^々し林^{りん}檜^{ひの}の
 欄^{らん}子^しに盛^もられ、手にとられ、
 君がみ脣^{くち}に吸^くはるべき
 木^この實^みの幸^{さい}をうらみかねつも。

— 乙巳二月二十一日 —

めしひの少女

「日は照るや。」聲は青空、
 白^{しろ}雀^づの遠^{とほ}きかゞ啼^なき、 —
 ひむがしの海をのぞめる
 高^{たか}殿^{どの}の玉^{たま}の階^{かゝ}、
 白^{しろ}石^{いし}の柱^{はしら}に凭^たりて、
 かく問^とひぬ、盲^{めくら}目^めの少^{せう}女^{にょ}。
 答^{こた}ふらく、白^{しろ}銀^{ぎん}づくり
 うつくしき兜^{かぶと}をぬぎて

ひざまづく若き武夫、

『さなり。日は今浪はたれ、

あざやか光の廻り、

丘を超え、夏の野をこえ、

今君よ、君が凭ります

白石の圓き柱の

上半ば、なびくみ髪の

あたりまで黄金に照りぬ。

やがて、その玉のみ面に

かどやきの夏のくちづけ、

又やがて、薔薇の苑生の

石彫の姿に似たる

み腰にか、い照り絡みて、

あまりぬる黄金の波は、

我が面に名残を寄せむ。』

手をあげて、めしひの少女、

圓柱、そと撫りつゝ、

さて云ひぬ、『げに、あたゝかや。』

また云ひぬ、『海に帆ありや。』

大空に雲の浮ぶや。』

武夫は、つと立ちあがり、
答ふらく、力ある聲、

あゝさなり。海に帆の影、――

いづれそも、遠く隔てゝ、

君と我がなからひの如、

相思ふとつくに人の

文使乗する船なれ、

紅の帆をばあげたり。――

大空に雲はうかばず、

今日もまた、熱き一日。――

君とこそ薔薇の下蔭

いと甘き風に酔ふべき

天地の幸福者の

我にかも厚き恵みや、

大日影かくも照るらし。』

少女云ふ、『あゝさはあれど、

君はたゞ見ゆるこそ見め。

この胸の燃ゆる日輪、

いのちをも燃きほろぼすと

ひた燃えに燃ゆる日輪、

み眼あれば、見ゆるを見れば、
えこそ見め、この日輪を。」

武夫はいらへもせず、

寄り添ひて強き咬やき、

「君もまた、えこそ見め、我が
双眸の中にかくるゝ

たましひの、君にと燃ゆる

みち足らふ日のかどやきを。」

かく云ひて、少女を抱き、

たましひをそのたましひに、

唇をその唇に、

(生死のこの酔心地)

もえもゆる戀の接吻

接吻ぞ、あゝげに二人、

この地に戀するものゝ、

胸ふかき見えぬ日輪

相見ては、心休むる

唯一の瞳なりけれ。――

日はすでに高にのぼりて、

かき抱く二人、かどやく

白銀の兜、はたまた、
 白石の圓き柱や、
 また、白き玉の階きざはし、
 おぼまかに、なべての上に
 黄金なす光さし添へ、
 高殿も戀なごのの高殿、
 天地あめつちも戀の天地、
 勝ちほこる胸の歡喜は
 光なす凱歌かいくさなれば、
 丘をこえ、青野をこえて、

ひむがしの海の上まで
 まろらかに溢れわたりぬ。

— 乙巳三月十八日 —
 — あこがれ篇畢 —

あこがれ以後

花ちる日

琴をひけ

沈の香のそよぎに
わが魂はあくがれぬ。

二人居の初夏や、
はしけやし黒髪よ、
琴をひけ、沈の香に。

たをやかにうつむくか。

沈の香はゆらぐなり。
 手ふれては鳴るものか
 わが胸も君ふれて、
 鳴りにしを、琴をひけ。

水無月の青日射、

庭の樹ぞみづみづし。

青梅は庭石に、

君が手は夏の譜に、

花あやめかぎろひぬ。

歌ひくき爪弾や、

沈の香はそよぎぬ。

はしけやし黒髪も

そよぎぬ、風ありて

一室は薫じたり。

——三十八年六月十日盛岡帷子小路にて——

佛頭光

こゝは生命の森か、さは、
 秀つ樹の枝の葉の色も、
 神の息をや染めぬらむ。
 幾時や経し、幾日経し、
 幻心さまよひて
 としもこゝに入りたる。

見れば年古る樹々は皆、

古き記憶の底にゐて
 呼びいで難き名の如く、
 なつかしくして、稚き日
 過ぎし事ある故郷の
 古道に似ても目は走る。
 鳥はいのちの葉の蔭に
 妙音の譜を奏でたり。
 黒ずむまでに光る葉は、
 ホメロスが世の曙に

吹きしままなる羽輕き
風に久遠をはためきぬ。

森を横ぎる川ありて、
すぎゆく我の影をのこし、
涯をも知らに流れ行く。
こは朝なりや、夕なりや、
はたこの世にや。——我はたゞ
わが足にこそ歩みたる。

勇みて輕き足音に、
蛇、這へる羽根虫も
木の根の穴に隠れたり。
ふとしも見れば、『永劫の
わかれ』を刻む石碑に
こゝは追分——森の辻。

一つの道は、灰白き
鋪石鑄びて坦かに、——
鐘こそ響け、——あはれ、こは

平和の郷の墓の手に
導き入れり。——人の性
これに迷へる子もありや。

我はためらふこともなく
たゞましぐらに進みける。
ゆき、また、ゆけば漸くに、
木の間を少し空見えて、
香かの木の實よ、たわゝにも
枝に満ちぬる黄金色。

疲れを知らぬこの旅の
幾時や経し、幾日経し。
尙しもゆけば、葉がくり
ものゝ聲あり。——覗へば、
神のやうなる幾人の
人の聲して我招ぐ。

いのちの森に迷ひ入り
先立ちて來し人ならむ。

『黄金木の實のしたよりの
これは不老の泉ぞ。』と
指さす葉蔭、ふと見れば、
常春の香よ、波に鳴る。

諸手に掬めば、水の面、
こはそもいかに、若き日に、
ふたよび逢へる我が影の
瞳に星ぞ宿りたれ。
また指さよれ、手を翳し、

ふりさけ見やる西の空。――
空の半ばを金色の
佛額光ぞ包みたる。
眩ゆさ、――あはれ、光明の
海の返照――尊とさに、
これ莊嚴の随一と
歸依の掌底合せぬる。

――三十八年八月二十一日盛岡市加賀野積町にて――

深みの心

西風さゝとおとして

秋雨すぐる急ぎに、

黄草の丘の凹み

小沼蒼き夕さびれ、

さゝ音にかなしき涙顔や、

曇りぬ、深みの眞鏡。

雨の洗ひし廊窓、

白雲仄はのけはひに、

やぶれの蘆の緒

古水の泥深み、

静かに宿しぬ、天ゆく雲、

あはれさまたなき思ひを、

ふとまた雲の亂れの

足並淀む夕方

間まを洩れて、花の

黄金よ、あゝひたひたと

水面に落ちくる入相日に
明りぬ、深みの底まで。

冷に見ゆらむ華やぎ、

それさへ、小野の隠りの

沼水の胸に、彌生

花蒔く日その春の

温みあるらむ、——祝の潛音

風吹き、黄草もかをりぬ。

黄草の丘を繞らす

凹みの古沼、深みの

心に、やがて、空ゆ、

啼きわたる白鳥の

おぼろの影あり、ゆらに降りて、

新月さすなる夜は來ぬ。

たはぶれ

答へもなきに、寄せては

氷れる岸に碎けて

帯とまくなる廣海、

聲白き波波の

穂がしら枯藻をかざすさまも

寒けき荒磯の小犬よ。

岩間の砂の冷たさ、

散らばふ枯藻ふみつゝ、

小犬よ、高く吠えぬ、

おごそかに絶間もなく

大洋廣みの胸をしほる

叫びにひとりし答へて。

吠えては、波のさしひき、

冬の日午後の日ざしに

しぶきそのまゝ凍りて、

きらゝにも珠散らす

渚邊、波の穂追ひつ、追はれ、
足痕消されつ、印しつ。

津輕の瀬戸の大船

函館がよひ行く帆の

灰の帆足を遅み、

聲かなし、海の鳥

羽さへ凍りぬ。——それも見じな、

波追ふ小犬の寒けさ。

出づる日迎へ走せつゝ

入月を追ひて走せつゝ、

この世さびしき渚、

我も亦人なれば、

興じて見にけれ、波と犬の

たはぶれ、人なき荒磯邊。

かりがね

わが立つ沼の汀に
 落ち、また、消えし影あり。
 月照る夜半のしぬびに、
 星人がしろがねの
 ○○をし奏で、空を行くと、
 影のみ見せしや、かりがね。

— 三十八年十二月五日 —

雨にぬれて

梅の老樹に雨降り、
 雨に濡れて、
 庭石冷ぞまさされ、
 おち葉を載せたり。
 かくして秋來ぬ、限りなさの
 かなしみ石にぞ凭りぬる。

愁ひて泣くに、涙の

雨に濡れて、

君に凭るなる我や、

尙こそみ胸の

ときめく温み、石に散れる

若葉にまさると知る日や。

— 三十八年十二月五日 —

みちのくの神無月

今、みちのくの神無月、花のき散らふ

裳のみだれ、かたむきかゝる日の錆の

幹あからさま透きいれる

漆の木原。——夢白の裾長らかに

枝づたひ幻にひく秋姫が、

わかれ心に、朽笹の弛み緒ならす

浮鳴りのそゝ音に走る空名残、

それとし聞くは、金蝶の

籠ばなれせし千萬羽。――

霜の繪映の黄染葉の月にひらめきて、

秋の舞散りに散りしく葉すれ音。

今、野がへりの田つくりは、

かなた、下田の杉寺の山の上そより

かたむける五輪、入日を支へ立つ

古塔の尖屋根、

九萬日老いて朽ち落ちし破れのさまも

そのまゝに影を投げたる廣穂川の、

ことし凶年、みのらねば、穂波も溢く、

さながらに草原めきし畔を指し、

「みのらで枯れし稻よりは、閨の戸までも、

来てわめく税吏等が首をこそ

刈るべけれとて鎌とげ。」と

しはがれ聲の高らかに、葉帯したる

老腰の二人、こゝをば過ぎゆきぬ。

見れば五輪の空高く

ひらめき出でし、つの晝の星かと

目もはるに輪形にうかぶ白鳩の

天座やうやうかたむくや、

たちまち落つる天降り矢の、入日に映えて
しるがね箭、つゞきに落つる幾筋や、

今、杉寺の廣庭に落葉を焚いて、

老比丘が無量壽品を口ずさむ。

褪緒の色の額や射む。

こゝ木原路、たえ間なく秋の舞する

黄染葉の、そよ、金擻りの小扇を

ひらくと見しは、籠につゞく後の丘の

高公緑樹、ちりのみだれの手狂ひや、

五片六片二十片、風の煽りに

浮立ちて、蒼の空吹く巴舞ひ、

はらゝぎ降りて、めでたさの御神樂や、

木原黄殿の夕扉、

今、神無月、舞納。

迥かに、聳る莊嚴の神色迫る

五輪塔、その背がくれにかくろひて、

消えのまぎはは香沈む頭光のさびの

透冠、紐とくひまもあらばこそ、

やねにかけたる入相日、

花めき散らひ物染めしうすき寒げの

裾長の黄紗オウサを高くひきからげ。
天梯てんた遠とほにけのびのみだれのさまに、
薄明り、いそまりかへる漆原、
霜も降るべき冷やぎや。

ふとしも起る人げはひ、近づきまさる
足音にさくら鳴りする散葉路ちぢばみち、——
さは、金蝶の千萬羽、石ならなくに
ふみしかれ、羽袖あはせて燦くわらせし
終焉の夢のにじられに
音にたつなげき鳴くやらむ。——

木の間すかせば、影二つ、旅づかれせし
足重の、藝人めきし扮装や、
提琴抱ける丈高の、聲の濁りも
力なく、「あはれ八里のむだあるき、つかれ
しや。」とぞ

都訛りにふりかへる、五つの絞の

古衿、肩も寒げの三十男みそとこ。

「否。」と答へて、女聲、
笑みもするらむ嬌かためきに、木がくれ見ゆる
村を指し、「君にし添へば、ひもじさも

忘れて、唄もくりかへし、宿さへあらば、
蝦夷が島そこにも行かむ、さは思へ。

たゞこの夜さの宿りのみ覺束なし。』と。

みめこそ見えぬ、顔白の、二十歳か、

いづれ、門毎に扇をかざす唄少女。

桃色襷せの長襦、袷ばさみせし

縞袴、今しを悄悄々とおちにたれ。

行き過ぎにして、男、また、

琴絃を掻くすさび言、

『安宿の吊洋燈にもかぎはあれ、

とまるすべなき法界屋かな。』

いつしか、見れば、木原路、

散りを急ぎの葉時雨の降る音もたえて

亥中月まつ宵闇や、

遠き羽音は、公縁樹立つ丘のうしろの

麓の沼にかりがね群れて落ちぬらむ。

かなた五輪のいたゞきに

秋ゆく空の一つ灯のみちしるべとぞ

うるみたる金星青く瞬いて、

今みちのくの神無月、

石の泣く音もきゝぬべき夜とこそ成りぬ。

——三十八年十二月六日——八日夜——

幕びらき

雪ふりぬ。——ところどころに群繁る
古き牧野の白楊の木立の中の
され果てし散葉のさゝ音しめやかに
白むと見れば、枯枝に花さへ咲きて。

雪ふりぬ。——廣野黄草のあら床に
布きはえわたる白妙の玉の砂は、
誰がために音無聲^{おとなしるまね}練りてゆく

御幸大路をつくるらむ、いと夷かに。

雪ふりぬ。——遠近に見る山や、はた

森、村、なべて隠ろひて、人立騒ぐ

大神の劇詩の中の一幕の

今舞ひ了へし静けさは太古のさまに。

雪ふりぬ、ひと日を。——かくて日の夕べ、

晴れにしあとはおしなべて昔もこそなけれ。

葉つる日の黄金を孕む横雲の

一沫、あはれ動きなき涅槃の姿。

ふと見れば、雲の真中に走せちがふ

うなる幾人、神の兒の面影なれや、

投げかはす雪の珠皆日に映えて、

あゝ戦ひの幕びらき、——その雄たけびに。

——三十九年一月十六日——

花ちる日

あゝ花散る日、古の道こそひらけ、
 南より北に一すぢ、故郷へ。
 並木の櫻年老いて、花も一重の
 薄雪や、降りこそかゝれ、みちもせに、
 今春の日はまろらかに、音無聲、
 こゝ過ぐれ、——かきやから蜃氣樓する北の海の
 霞の帆ひく貝船へ。
 駒の蹄のあと深くみちに彫られし

百年の長き沈黙、ものうげに
 額をもたげて息づくや、山鶯も
 花かげの休らひ、音をぞ潜めつる
 あゝ花散る日、かゝね日を、丹塗の槍柄
 立てなめて、國歸りする途すがら、
 奥大名の行列の騎馬の侍、
 華やかにだぐ跑をゆるめて練りにけむ。
 また、喜びに、悲しみに、おのがじしなる
 足どりの百千の人や過ぎにけむ。
 はた忍ばるれ、幾年の昔、我が世の

春若き戦の門出、かゝる日に、
 脈は希望の波高き生命の鼓、
 ものとなき勇み心に歌うたひ、
 この道をこそ花踏みて南せし日を。
 あゝ花散る日、うらぶれて、また歸り來し
 我なれや。——綻び多き袖袂、
 つくらふとてか降りかゝる花の薄雪、
 みちもせを埋めにけりな、いたづらに
 散り、また散りぬ、かくながら、春はまた來ぬ。

人の世のいのちの花の散りゆかば
 残るはたゞに蒼白き追憶の影、
 冷えわたる胸は涙に朽ちぞゆく。
 あゝ花散る日、うらぶれの
 つかれににぶき眼あぐれば、
 朧ろに霞む春の空、今暮れかゝる
 北遠く鐘こそ響け、幽かにも
 あゝなつかしき黄鐘わうじやの調べよ、あはれ、
 故郷の昔ながらの入相や。
 花ちりしきてほの白き

道ひとすぢの夕まぐれ。

——三十九年三月十九日——二十日於濹民村——

吹 角

みちのくの谷の若人、牧の人は
若葉衣の夜心に、

赤葉の芽ぐみ物燠ゆる五月の丘の
柏木立をたもとほり、

落ちゆく月を背に負ひて、

ひと夜明しぬ。

東白しのぼの空のほのめき——

天の扉の眞白き礎ゆ湧く水の

いとすがすがし。——
 ひたひたと木陰地に寄せて、
 足もとの朝草小露明らかみぬ。
 風はも涼し。

みちのくの牧の若人露ふみて
 もとほり心角吹けば、
 吹き、また吹けば、
 溪川の石津瀬はしる水音も
 あはれ、いのちの小鼓の鳴りの遠音と
 ひびき寄す。

あゝ静心なし。
 丘のつゞきの草の上に
 白き光のまるぶかと
 ふとしも動く物の影。——
 凹みの埒の中に寝て
 心うゑたる曉の夢よりさめし
 小羊の群は、静かにひびき来る
 角の遠音にあくがれて、
 埒こえ、草をふみ、だき、直ひたに走りぬ。
 曉の聲する方の丘の邊に。——

あゝ歡びの朝の舞。

新乳にちちの色の衣して、若き羊は

角ふく人の身を繞り、

すゞしき風に啼き交し、また小躍りぬ。

あはれ、いのちの高丘に

難ぞ角吹かば、

我も亦この世の埒をとびこえて、

野ゆき、川ゆき、森をゆき、

かの山越えて海越えて、

行かまじものと。

みちのくの谷の若人、いやさららに

角吹き吹きて、靜心なし。

——三十九年八月十一日、於葦民村——

公孫樹

秋風死ぬる夕べの

入日の映のひと時。

ものみな息をひそめて、

さびしき深く流るゝ。

心のうるみ切なき

ひと時、あはれ、仰ぐは

黄金の秋の雲をし

まとへる丘の公孫樹。

光榮さかえの色よ、などさは

深くも黙し立てるや。

さながら遠き昔の

聖の墓とばかりに。

ましろき鶴のひとむれ。

天の羽羽矢と降り来て、

黄金の雲に入りぬる。

あはれ、何にか備へむ。

樹の下、馬を曳く子は、
たはれに小さき足もて、
幹をしふみぬ。あゝこれ
はたまた何に似るらむ。

ましろき鶴のひとむれ、
羽ばたき飛びぬ。黄金の
雲の葉、あはれ、法惠の

雨とし散りぞ亂るゝ。

今、日ぞ落つれ、夜ぞ來れ、――

眞夜中時雨また來め。――

公孫樹よ、明日の裸身、

我はた何と歌はむ。

――三十九年十一月十七日夜於盛民村――

泣くよりも何故に

「その人はいかにかしたる。今も猶

君は戀ふるや。」かくいひて、

我が物語聞きわたる

少女は髪をかき上げぬ。

「否。」と答へて、ゆるやかに

我は煙草の煙吹く。

「一月ばかり過ぎて後、我その人を

見捨てにき。——あはれ七年また逢はず。」

「あゝ、何故に、君よ、さは。」

「髪白かりし伯母君が

ひきぞ出でたる洋琴の

戀の思出きし故。」

泣くよりも

その人に、夢の中にて
 いつの年、いつの夜としもわかなくに
 我は逢ひにき。
 今は早や死にてやあらむ。

したゝかに黒き油を髪にぬり、
 病みて死ぬ白き鬼の毛の如も
 厚き白粉

血の色の紅をふくみて、

その人は、少女にまじり、みだらなる
 歌の數々、晴れやかに三味かきならし、
 火の如つよく舌をやく酒を呷りぬ、
 水の如。

居ならぶは二十歳許りの

酒のまぬ男らなりき。

「何故に、さは歌ふや。」と我問ひぬ、

夢の中にて。

その人は答へにけらく。

酔ひれし赤き笑ひに、

「泣くよりも。」

嫂

いと長き旅より、我は

なつかしき故家にかへりぬ。

その夕、わが嫂は

子らつどへ、頭撫でつゝ、聞かせにき。

馬の話を、

さて曰く、「君何故に

八年の長き間をおのが家に歸らざりしや。

何故に旅に行きしや。」

面染めて我は答へぬ。「その昔、
君はせざりき、馬の話を。」

辯疏

「われなどて君を厭はむ、
さなり、我、などて厭はむ。」

「さらば、などかの木の下を
かの人と手とりゆきしや。」
かくぞ君われを詰れる。

「さらばとか。乞ふ、唯一つ、
聞き給へ、我が辯疏を。」

あはれ唯初めて君を見たる日の
その心もと口づけぬ、かの少女子に。
我つひに二心なし。」

小さき墓

彼は今歸り來りぬ、ふるさとの
古木の栗の下かけに。——
そが下に稚兒こそ眠れ、二十とせを
父が手向の花も見ず。

あゝ、二十とせを春くれば、葉ぞ且つ芽ぐみ、
鳥なきぬ、小さき墓のその上に。
また、二十とせを秋くれば、葉ぞ散りしきい

實も落ちぬ、安き眠りのその上に。

彼は今歸り來りぬ、いと長き

旅より。——彼は海を見き、山を見き、また、

古の跡と、來む世の市を見き。

汝が見も知らぬ妹は人に嫁ぎぬ。

されど、今、彼は語らず、外國の

港々の物語、また眉若と

戀人と手とりかはして椰子の樹の

下かけ歩む妹のその幸ひを。

しかはあれ。汝も亦問ふな。稚兒よ、たゞ、

その終焉の日の笑に彼を迎へよ。

「汝が父は汝を美む。」と唯一語。

つめたき碪はぢいしに口づけて彼は眩くらやく。

——この篇は四十一年五月二十四日本郷、坂町にて作れるもの——

黃
草
集

さすらひ心

古苑

夜の風吹くよ、和らや、

この古苑、

若葉の木の間に、沈み心地、

夜の手に曳かれて、我、今。

旅の身なにか知らむや

ゆめのいのち、

春ゆく方をぞたづねわびの
さまよひ、今宵はこの苑。

荒れたり、——これや、(知らねど)

古きかたみ、

白石くづれし樹のかたへ

半らは枯れたる櫻樹。

見よ、見よ、照るは三日月、

老櫻の——

殘人のあはれや、——一重花に

若眉さびしのほのめき。

白石小欄くづれて、

長もよとせ、

人々ぞ凭らされ、おもひいで

涙か、花ちるけはひよ。

いで、いで、夢よ、今こそ、

花降る夜半、

さめきて、うたへや、古き歌を、
こゝにし逢ひけむ二人の。

(戀、皆、花も、なべての
うるはしきは、

市にか葬られ、春も往にて、

古苑、——月さへ沈みぬ。)

(あまき口づけ清らの
あこがれ、はた、

かくこそ荒むや。——若き我は
くづをれ心のかなしき。

夜の風ほのか。(この身の

とはの檜家、

ありや。)と思ふに、夢に啼くか、

いにしへなつかし、鶯。

旅の身春を追ひきて、

この古苑。

若胸、おもわに、一重花の
口づけしげきをたゞ泣く。

—三十八年三月中旬—

卯月の夜半

眠れる人はさめてこそ
まことの暗を知るべけれ。
さめたる人は眠にぞ
まことの光したしまむ。

卯月の夜半の花の窓、
夢の樹蔭に身はさめて、
(ねむりか、あらず、永劫の

ゆめの中なるさめ心地。
 天地つゝむ花の香の
 うるほひふかき影の世や、
 さめてさめざる一瞬に
 光と暗を忘れける。

—三十八年四月中旬—

よみがへれ

「よみがへれ、今、よみがへれ、
 魂よ、悲哀の甕を破り、
 脱けて木の間の幻の
 花の心に甦れ。」

聲はさくらの花に充ち、
 花光りする風の羽の
 照りのまにまにたゞよへり。

夢の虚の残骸に

さゝがに小さき哀しみの

目にこそ似たる魂さめて、

(覺醒よ、いのちの苦痛の)

ほそきうめきに嘆すらく、

『あゝ今日も亦日はてるや、

また、世に花は吹きぬるや、

かくて永劫かはらざる

輪廻の路の岩陰に、

おちて朽ちゆく破甕の

涙の滓に身をひたす

この苦しみのさいなみを

のがれむ暗の世はあらじ。

あゝかくて又永劫の

かはらぬ光照る日見て

わが悲しみは新たなり。

櫻のまぼろし

「あめが下、知らぬ人なき
 詩人の君を慕うて、
 はろばろとこの一千里、
 春の旅あこがれ來ぬ。」と、
 南の國の訛りの
 艶なるや、少女の言葉。
 ふと見れば、訪ふ人もなき
 佗住居、まどの小桶に、

ひと枝の櫻の盛り、
 笑むが如、花は匂へり。
 「北國の鄙つ女ながら、
 春の日の苦吟の御庭、
 朝あさ淨きよめ、我つとめむ」と、
 聲はまた、若きうぐひす。
 ふと見れば、竹の小縁の
 端ちかき櫻一株、
 うす紅の匂へる綿を
 枝々にかつぎで立てり。

「病臥す我が兄人が
とし頃この詩卷に

朱の筆をいれて給へ、と、

西遠き筑紫の野より、

春使、身はまゐりぬ。」と、

聲はまた香ある花露

芝草におつるが如し、

ふと見れば、井筒のかたへ

うら若き情のいろに

もえ立つや若樹の櫻。

姿よく花さき充てり。

「わすれしや、君、わすれしや、

みちのくの篠木の里に

のこしけるこの思ひ兒を、

文言葉「來よ」とは無けれ、

春風のさそひのまゝに

花も咲き、春も足らふを、

ひとり住み、すねてあるべき

いはれこそ無しと思ひて、

東路をおもひの路や、

かくこそは訪ね來ぬる。』と、

聲はまた、甘きそよ風、

わが頬をそよと打ける。

喜びの眼あぐれば、

東の窓に立ちたる

藤たげの大葩はなはな櫻さくら、

ふくよかにほゝゑむ如く

あびにたる日中の日影

花毎に溢れあまりて、

ながれては我が小机に

ひろげたる料の紙にぞ

思ひ文黄金に染めぬ。

「貧うたげしかるこの詩人も

幸多き日はありける。」と

筆擱きて我ほゝゑめば、

花曇り吹く風ありて、

幻のさくら少女も

もろともに喜びあふや、

一しきり、窓に、庭面に、

うす紅の星を舞はせぬ。

夏は來ぬ

—

海こえて夏は來ぬ。——

三千里波を御す

白駒の青きいぶきに

世は今樹々の若嘶え、

さなり、その青の園。

山こえて夏は來ぬ。

さくら色うすべにや、

「春」の羅の長き裾追ふ

若ものゝふの太刀姿、

さなり、その息燃ゆる。

野をこえて夏は來ぬ。——

生々しいさく黒腫こくそうの

二人なり。かろき足並、

かどやく草野駈けめぐる

さなり、その戀の野邊。

森こえて夏は來ぬ。――

八寸の星形に

さきほこる百合の島より

海經て來ぬるそよ風の、

さなり、その香は甘し。

丘こえて夏は來ぬ。

はたたためく強光り、

黄金の翼を負ひて、

高天がける青龍や、

さなり、その赫灼に。

二

南より我は來ぬ。――

夏の日を讀ぜむに、

我が心、絃はほそしと

秀歌の都のがれ來て、

さなり、その落人や。

一百里我は來ぬ。――

夜の鳥の聲遠き

静夜の揺るゝ灯影に
ひとり泣かむとみちのくへ、
さなり、その一百里。

夢心我は來ぬ。——
いにしへの宮城野の
さすらひや、おちうど心、
立ちて物思ふ岸の宿、
さなり、その川青し。

にげ心我は來ぬ。——
息きれてのぼりける
天主閣、——海をも見たり、
遠野も見たり、——夏は來ぬ、
さなり、その夏は來ぬ。

天地に夏は來ぬ。——
打帳み、來て寢れば、
旅やかた、この落人に
似たり、しばなく杜鵑、

香
蓋

314

さなり、その夜の鳥。

——五城二首のうちよりこれを探る。——

——三十八年五月二十六日土井晩翠氏に送れるもの——

妹よ

——堀合たか子に——

涼風吹くや、水無月の
若葉の匂ひ、佗住みの
夢の名残の跡ぎよめ。
朝餉はてたる窓の中、
澁茶を啜る興がりに、
香爐の青磁はしげやし、
風上に置く風流や、

佗のおごりはこれのみと
 わが手淨めて沈焚けば、
 何の香ぞもと妹よ
 君はしづかにほゝゑみぬ。

灰色ひくき町の空、
 杉ある寺の南や、
 木柱に葺ける屋根の上
 とび交ふ鳩の白き羽を
 見よと指さし、清淨の

魂の行方に目はなてば、
 あなやと君も星光る
 ひとみたゆげにうなづきぬ。
 我にならべる姉人の
 やはらの膝によりかゝる
 君はをさなき妹の、
 姉に似たれば、無花果の
 新樹のかげのほのめきに
 ほゝゑみ見せておとづれし

今朝の吾家を幸ありと、
あはれ、詩に瘦せ文に瘦せ
ほゞけし我はなぐさみぬ。

世の荒海路、梶も折れ、
捨小舟とぞ流れたれ。

我まつ人の胸ふかく
つきぬ泉の聲ありと
めざめて、こゝに、初夏の
すまひ侘しき家ながら、

さだめの外の恵みにか
清きほこりの日ありと、
吟じて暮らすこの頃を、
秀歌はなけれ、慰さみは
諸手にあまる祝福に、
よし、かしましき騒人の
群にはぐれてありとても、
牢さびたる都より
我世はひろき愛の野の
新苑守、向日葵の

あこがれ映ゆく見てあれば、
 野の石抱くさすらひの
 悲歌に血吐きし孤兒も、
 心の空に雲遊び、
 心の枝の風光り、
 破壁ひくきこの室や、
 焚くなる沈の香煙に
 魂やはらかに包まれて、
 あゝ、この愛の聖籠に
 我はも若き淨身の

沙門とはほこらるれ、

君うら若き妹よ
 よしや深森香木の
 朽つる日見るも、あこがれの
 法林、愛の枝々や、
 しづかにわたる我が歌に
 まどかの夢の調あり。
 君たをやめの、年長けて、
 髪に香たき、貝摺りの

柿に黄金の象眼や、

はえくしさに眩ゆさに

さかえの苑生踏むとても、

忘るゝ勿れ、身は瘦せて

心瘦せざるうたびとの

二人、草野の孤ひとつや家に、

さだめの外の恵みにか

清きほこりの日を知ると、

缺けし香爐に沈焚きて

吟じて暮らす風流を。

君に書くなるこの歌の

しらべは低き夏ながら、

夏の二人のほゝゑみに

ほゝゑみにこそ綴りたる

八十行の我が心、

我が心こそほゝゑむに

君も笑みてぞうけよかし。

江
畔
雜
詩

326

さみだれ

—

五月雨聞き「かなしみ」の
 雫しとゞに降りそゞぐ
 泥ぬの小溝こまのさゞ流れ、
 水み嵩がさにこりて、毒芹どくせりや
 細蘭、小よもぎ、田うこぎの
 岸の細根に、運命の
 小さき淀みや、小渦巻く
 淵の濁りに底もなし。

二

うづまきぬ、あゝ、降りそよぐ
その「かなしみ」の溢れ水。

(人は動き微の香の

壁をにらみて、壊れてゆく

心をとさす時ならむ。)

天の鏡の灰曇り、

静かに壓すや、薄暗き

溝の腐敗に濁り入る。

三

水の華なる泡沫の

ひと瓣のまろき花びらも、

にこりて儼えし泥の香や。

よもぎの下葉黄にたゞれ、

みどりの舌の毒芹の

根には小蟻の巢も朽ちぬ。

細蘭のみだれ折れあひて、

田うこぎ喰みぬ、雨虫は。

四

七日七夜の直降り

「不壞」の若は顔えたり。
 物のよろづのいのち、皆、
 「腐敗」「荒廢」の世に入りぬ。
 地は、かなしみの濕沼の、
 世の初めより覺めずして、
 死にてありける黒土ゆ
 よろづの根、皆、「死」を吸ひぬ。

五

あゝ、かきくらす五月雨の
 垂れてひらかぬ黒幕の

しめじめしたる息の香に、
 「死」の種子こそは萌え出らむ。
 はびこる「陰影」に樹々の葉も
 かぐろみわたり、活動の
 火のぬくもりも消えはてし、
 氓びの夢は漲りぬ。

六

七日夜ながき直降りは
 かくてあがりぬ。——入相の
 日は血の色の赤々と、

雨霰きれし西の涯。

いそぐともなく、せくとなく、

静かに、低く、力なく、

沈みをはりて、黄昏ぞ

物の不淨に下り立てる。

七

降りかたまけし「かなしみ」の

水嵩あふるゝ泥の溝

草の亂れに風もなく

寂寞じやくまくを呼ぶ斷末魔、

たそがれてゆく運命の

にごり底なき小淀みに

たじろく如くかすかなる

光を投げぬ、星二つ。

八

あゝ、二つ星、いとほそく

つゝましげなる瞬きに、

天に咲くなるほゝゑみを

うつす「黄」の花、「青」の花、

何の宮居の御燭みまがしの

消えぬ色をや染めぬらむ。
 「腐敗」くされ「荒廢」すさみの邊沼しづりぬに
 見よ、「清淨」を宿したる。

——三十八年七月四日——

野の花

千萬世ちまよのむかし、天つ穂の
 露ひと雫野におちて
 うるほひ沁みし恵まれの、
 さは、花種のくはし芽の
 花とし咲くや、世々に、また
 今もよ咲きぬ。——野はひろく、
 空蒼き世に、朽ちぬ日の
 常盤心のときめきに。

仄には咲けれ、めぐまれの
 野の花、あはれ、ひと花に、
 天の祕れの光宮の
 花燈に照らふものみなの
 心ぞさくと、にほへばや、
 咲き、また散りぬ、祝の日の
 ことぶき、——二日三日乍ら
 生の日光のふところに。

——三十八年十一月二十一日夜——

燕

南の枝につばめは
 巢こそくへれ。
 若軟草の青牀。
 戀はるゝ二人は
 新苑花垣ゆひて守る。
 あゝ、この春風うれしき。

柳しづれて、濡羽の

つばめうたふ。
 うたうもうれしや、新苑、
 けふこそ、二人は
 濡れてぞ擁きぬ、しぬび心。
 あゝ、この春雨はづかし。

—三十八年十二月五日—

海邊の春の夜

えも見ぬ花の鳥影、

朧月夜、

春の淡海のかなた

おぼろのけしきを

見しとて、海士が子、ひとり船を

漕ぎ出し話もおもほゆ。

水平線のほのぬき、

月のけはひ。

浪みな匂ふ浦回

少女はうたへり。

網干す櫻の枝に花の

揺曳スズユヅ、雲かとはかりに。

汀に足を洗ひて、

波に散らふ

花、片足に斑ら。

かへらぬ海士が子

おもへば、旅の身わが故郷

今宵の岸こそ忍ばゆ。

丙午三十九年

野ばら

水無月ふかきうるほひの
朧ろの淵のみ空より、
祭女の花笠の
ふと後見るなよびかに、
宵月の影野にひくし。

せらぎ添ひの畔路の
片側薄き雪の色、――

野茨若芽の枝々に
ともせる百の匂ひの灯、
今、ほのじろく燼るなる。

—三十九年一月十八日夜—

木犀

羽白きみはしろ鳳ほうに

うちのりて、紫の

晶玉の門ちかく

とび來ぬと、目さむれば、

おぼしまにたゞひとり、

わが酔はさめはてぬ。

庭ひろき宵闇に

木犀のかをりのみ

澁民村小吟

350

いと高く流れたり。

—三十九年一月二十日—

山杜鵑

若芽柏の木の間の

下暗たどり來ぬれば、

遠方小角くたの音ぞする。

垣朽ちし古牧の

夕月てらせる草の上に

黄牛あうししづかにまろべり。

落ちてゆく月の丘邊に

牧の子ひとり走れり、
 鞭のひびきをきけるや、
 牛皆起ちて啼きぬ。
 ふとしも木の間に聲ぞ騒げ、
 山杜鵑の名告るや。

——三十九年四月二十日夜——

雪の夜

雪ふる夜半のともしび、
 きえ、また、明る。——音なし。
 白髪かづき垂れたる
 眞素足の山の翁、
 戸外とのもに立つらむ。——戸こそ叩け、
 ふと灯ぞ消えたれ。——風なり。

——三十九年十一月十七日夜——

函館の歌

水無月

砂山は長くつゞきて、水無月の
日は照りかへり、砂は蒸す。

海草の香はいと強く

流れぬ。あはれ、日に酔ひて

啼くなる鳥の磯雲雀、

歌はも高し。

大空に雲は浮ばず。大牧の

青の廣みの夏の草

日に臥すさまや、浪なげる

海のかなたに、白羊の

群とし見ゆる心安の

帆こそは遊べ。

ふみゆけば、蹠あしうらに砂の心地よし。

身は漂泊のたゞ一人。

渚に寄せて花と咲き、

くだけてかへる波の音に

思ひぬ、遠きふるさとの

母の渚邊。

砂ひかる渡島の國のはなれそ磯や、

我は小貝を、我が母は

若布ひろふとつれ立ちし

濱茄子かをる緑叢に

朝風すなる若き日の

あはれ水無月。

蟹に

潮満ちくれば穴に入り、
 潮落ゆけば這ひ出でよ、
 ひねもす横に歩むなる
 東の海の砂濱の
 かしこき蟹よ、今此處を、
 運命の浪にさらはれて、
 心の籠の燈明の
 汝が眼よりも小やかに

滅えみ明るみすなる子の、
 行方も知らに、草臥れて、
 辿り行くとは、知るや、知らずや。

馬車の中

花咲かす、雨のふる日の
 街をゆく馬車の中なる
 年若き我は旅人。
 わが泣くをとがめ給ふな。
 函館の少女子達よ、
 煙草吹く年寄達よ、
 情ある乗合人よ。
 わが泣くをとがめ給ふな。

そよけたる髪に霜おき、
 皺ふかく面瘦せはてし、
 貧しげの媪の君ぞ
 わが側に坐りたまへる。
 よく見れば、さにもあらねど、
 その頬よ、あゝ、故郷に
 たゞ一人居給ふ母に
 いと似たり。縞目もわかす
 褪せし衣、そもまた似たり。
 袖口のきれしも似たり。

など、かくと、そは我知らず、
見れば、たゞ、涙し流る。
年若き我は旅人、
わが泣くをとがめ給ふな、
情ある乗合人よ。

—五月二十六日—

流木

わだつみの青き鼓は
とどろけり、去年も今年も。
しらしらと明けゆく朝も
曇りたる夕も、恒に
かはるなきひびきをあげて、
程裕と碎くる浪の
浪頭目も夜も白し。

白砂の長き渚は

弓のごと海を抱けり。

ちりしける枯藻のなかに

足痕も印さす。はたや、

沖をゆく帆も見る日なし。

時ありて嵐は來り、

渚邊のところどころに

砂山を築きては去る。

あはれ、その渚の上に

横たはる大流木、

さしわたし七尺ばかり

砂山に根をうち上げて、

枝もなき長き幹をば

その半ば海に入れたり。

海鳥は時にかどなき、

その上に翼やすめぬ。

われ來り、この流木の

かたはらに、小犬のごとく。

寝ころびて、青き鼓の
 とどろきを直にぞ聞ける。
 身じろがず、荒磯の砂の
 つよき香を直にぞ吸へる。
 あなあはれ、覺むる期もなく。

黒き箱

ふるさとの港を出で、
 七日経ぬ。水や空なる
 目路の涯、たゞひろびると、
 一寸ちの煙だになし。
 矢の如く船は走れり。
 舷の白き潮浪
 その中に浮きつ沈みつ
 たゞよへる黒き箱見ゆ。

その中に何か入りたる。

唇紅く黒髪長き

生首か。讀む人もなき

文字書ける尊き經か。

はた、空し、虚か。知らず。

漂ひて、浮きつ沈みつ、

破れざるかの黒き箱。

おそろしきかの黒き箱。

白骨

はてもなき夏草の野を、

一寸ちの白き埃の

幅ひろき路ぞ、西より

東より直に横ぎる。

路のべに、あはれ立ちたる

一もとの名なき大木。

ひろげたる繁葉の枝は

さながらに青き傘^{アサギカサ}

とある年、とある夏の日

遙かなる西の方より

迎り來し異國人^{コトクニヒト}の

旅の隊^{たい}三百ばかり。

先達ぞ先づ杖すてゝ

大木の下に憩^いへば、

老いたるも若きも共に、

少女子は髪かきあげて、

病ある馬上の人も、

みななべてこゝに憩ひぬ。

くわと照れる夏の日さかり、

こゝのみは繁れる葉より

霏^ししてたゆることなき

涼風^{すずかぜ}ぞ幹^みをめぐれる。

さればかの旅の人々

いつとなく深く眠りぬ。

あなあはれ。あなあはれ。
旅人は今も見らむ。
はてもなき夏草の野の
大木の下に眠れる
三百の白き骨ども。

大正十五年二月十五日 印 刷
大正十五年二月廿八日 發 行

定價金九十五錢



編 者 佐 藤 寛
發 行 者 兼 東京市日本橋區檜物町九番地
前 田 隆 一

發 行 所 東京市日本橋區檜物町九番地 紅 玉 堂 書 店

振 替 東京三六一六番
長野三二六八番